

平成30年度  
八戸学院大学短期大学部 一般入学試験（第Ⅰ期）

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。

※注意——解答はすべて解答用紙に記入すること

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国の特別天然記念物で、絶滅の危険性が極めて高いコウノトリが、人工繁殖を経た放鳥によって少しずつ増えていく。自然に定着したつがいからヒナも生まれ、野外で生息するコウノトリは6月、100羽を超えた。コウノトリは、多様な生き物がすみ生態系がなければ、定着も繁殖もできない。里山の自然が保たれていることを示す生きた鑑といえる。この取り組みをaジゾクさせ、より多くの個体が大空を飛び回る環境にしたい。

兵庫県豊岡市では、地元の人々と市、県が協力して飼育や繁殖に取り組んできた。野生復帰のための放鳥を始めたのは12年前のことだ。この間、46都道府県で飛来が確認された。

背中につけた発信器から、福井県で放鳥されて列島各地を舞い、海を越えて韓国へ渡り、北朝鮮まで羽をのばしていたオスもいることがわかった。繁殖地も徳島県や島根県に広がった。

コウノトリはかつて全国各地で人の身近にいた。I、明治期からbシユリョウによって減り、戦時中は営巣するマツが燃料用にcバツサイされ、行き場を失った。

長いくちばしで水田や湿地にすむカエルやドジョウ、魚、昆虫など大量のえさを食べる。農薬の影響で戦後も生息数が減り続け、71年に野生の個体が消滅した。

豊岡では半世紀前から人工飼育に取り組んだが、親鳥の体がえさを介して農薬に侵され、卵からヒナがかえらなかった。そこで地元の農家が「コウノトリもすめる町に」と、無農薬・減農薬の農法を始めた。雑草を根絶やしにせず、収量が大幅に落ち込まない程度ならあってもいい、と発想をdテンカンさせた。

冬も田に水をはり、春はオタマジャクシが育つまで水を抜かない。一年中、生き物がいる水田づくりにも努めた。II、コウノトリのえさのカエルが害虫を食べてくれ、里山の食物（A）が戻り始めた。コウノトリの野生復帰を支える中で、地域の人々も健やかに暮らせる環境の大切さに気づいたという。

兵庫県立コウノトリの郷（さと）公園の山岸哲（さとし）園長は「人間は自分たちの都合で自然をeカイへし、多くの生き物を絶滅に追いやった。どうやって共生できるかをみんなで考えていきたい」と語る。

環境省の今年のレッドリストで、絶滅のおそれのある「絶滅（B）種」の動物は1372種で、2年前より35種も増えた。

在来の多様な生き物を守るため、里山の自然を取り戻し、保つ。それは多くの生き物の生息地を奪ってきた人間の責務だ。

（朝日新聞社説2017・7・16）

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字で書きなさい。

問二 IとIIに入る接続詞を次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ そして ウ すると エ だが オ むしろ カ さて

問三 （A）と（B）に入る語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 危機 イ 懸念 ウ 危惧 エ 摂取 オ 連鎖 カ 連関

問四 次の文が入るべき箇所の直前の五字を抜き出さない。(句読点を含む)  
人間の活動が、絶滅の危機に追い込んだと言える。

問五 二重傍線部「この取り組み」について、簡潔に説明している箇所を後の本文中から三〇字以内で抜き出さない。

問六 問題文の表題を一五字以内で考えて書きなさい。

## 二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分をつくる読書といっても、確信を得るばかりが自分をつくる道ではない。むしろためらうこと、溜め(た)ることを「技」として身につけるのが、自分をつくる読書の大きな道筋だ。

本には実に様々なものがある。aキョウレツな著者も揃っている。正反対の主張のものも店先では並んでいる。私は大学の授業では、学生に自主的なプレゼンテーションを、二分でももらうことにしている。そのときに、毎回同じ著者の作品を発表する者ができてしまう。これは非常に狭いプレゼンテーションだ。そうした学生のbトクチョウは、妙に自分の(実は著者の)意見に確信を抱いてしまっているということだ。充分な教養もできていないのに、数冊読んだだけで絶対の自信をもってしまうのは、いかにも危険だ。

多くの本を読めば、一つひとつはA化される。落ち着いているいろいろな思想や主張を吟味することができるようになる。好きな著者の本を読むだけでは、こうした「ためらう」心の技は、鍛えられない。すぐに著者にB化して舞い上がるというのでは、自己形成とは言えない。

自己形成は、進みつつも、ためらうことをプロセスとして含んでいるはずだ。人間は努力をする限り迷うものだとしたのは、ゲーテだ。一冊のC的な本をつくってしまうのならば、それは宗教だ。冷静な客観的要約力をもって、いろいろな主張の本を読むことによって、①世界観は練られていく。もちろん青年期には、何かに傾倒するということがあっても自然ではある。しかし、その傾倒が一つに限定されるのではなく、傾倒すればするほど外の世界に幅広く開かれていくというようであってほしい。一つの本を読めば済むというのではなくその本を読むと次々にいろいろな本が読みたくなる。そうした読書スタイルが、自己をつくる読書には適している。

ためらうというと、否定的な響きを持つているかもしれないが、②ためらうことは力を溜めることでもある。一つに決めてしまえば気持ちは楽になるが、思考が停止してしまいがちだ。思考を停止させずに吟味し続けるプロセスで、力を溜めることができる。本を読んでいると、著者に直接反論できるわけではない。少し自分とは意見や感性が違うと思うことももちろんある。しかし、直接反論できないので、その気持ちを心に溜めていく。はっきりとは言葉にして反論できなくとも、その溜めたものは、やがて力になっていく。そして、別の著者の本を読んだときに、あのと感じた違和感はこれだったのかと気づくこともある。自分自身でその違和感を持った本について人に話しているときに、違和感の正体に自分で気づくということもある。読書は、完全に自分と一致した人の意見を聞くためのものというよりは、③「摩擦を力に変える」ことを練習するための行為だ。自分とは違う意見も溜めておくことができる。そうしたcヨウリョウの大きさが身についてくると、懐が

深くパワーのある知性が鍛えられていく。

ためらうことや溜める<sup>た</sup>ことを、効率が悪いこととしてdハイジヨしようとする風潮が強まっている気がする。十代の後半などは、このためらい自体をeフナイキとして味わうのがふさわしい時期であったのだが、現在は効率の良さを求めるあまり、ためらう溜める<sup>た</sup>ことの意味が忘れられかけようとしている。本を読むという行為は、この「ためらう溜める<sup>た</sup>」という心の動きを技として身につけるためには、最良の方法だと思う。

(齋藤 孝『読書力』)

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 

A
---

 ～ 

C
---

 に入る語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 画一    イ 相対    ウ 絶対    エ 自己目的    オ 神聖    カ 同一

問三 傍線部①について、同様の内容を述べている一文を抜き出し、最初の五字で答えなさい。

問四 傍線部②とあるが、その理由を本文中の言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

問五 傍線部③は、どういうことですか。本文中の言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

三 次の①～⑤の三つの空欄に共通する漢字を入れて熟語を作りなさい。漢字は後の語群から選び、記号で答えなさい。

- ① ( ) ( ) 結 ( ) ( ) 傷・冷 ( )
- ② ( ) ( ) 負 ( ) ( ) 求・申 ( )
- ③ 本 ( ) ( ) 除 ( ) ( ) 書 ( )
- ④ 精 ( ) ( ) 闘 ( ) ( ) 胆
- ⑤ ( ) ( ) 力・脅 ( ) ( ) 厳

ア 勝    イ 魂    ウ 凍    エ 概    オ 威
カ 籍    キ 完    ク 氷    ケ 励    コ 請

四 次の四字熟語の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。(解答欄に二字記入)

- ① 用意シュウトウな計画を立てた。
- ② ソッセン垂範して事に当たる。
- ③ いつまでもガデン引水の理屈をこねるな。
- ④ 主人公はジュウオウ無尽の活躍をした。
- ⑤ ユウジュウ不断の煮え切らない男だ。